

福音の少年 外伝

「来訪」の真実

一八九九年、アメリカ合衆国アリゾナ準州フラグスタッフ郊外。

後の世の職を失った聖職者たちは、その時そこで「終末を告げるラッパ」が鳴ったと言っ。しかし、黙示録にそう書いてあるからといって、その後の百年間を「この世の終わり」と呼ぶのは気がひけるというものだ。たった六日間で造られたという世界の終わりが百年もかかるというのは、いささかバランスを欠いているのではないだろうか？

歴史家は、「その出来事はターニングポイントだった」という。すると、人類という奔馬はその時、向きを変えたのか？だとすればどこへ向かって変えたのか。その先に待つのは黄金の夜明けに至る心地よい小径なのか、それとも肥溜めへと続くぬかるんだ轍だらけの道なのか。

本当のところ、何が起きたのか？

あなたは答えを知るだろう。

その日、フラグスタッフには陸軍の歩兵部隊一万、アリゾナ民兵三

千が駐留していた。標高二千メートルにある小さな町がいまや兵隊でごったがえしていた。彼らはみな疲れきっていた。この数ヶ月間、ほとんど電線工事ばかりやらされていたのである。彼らは、このアリゾナ準州の小さな町を中心に、東はシカゴから西はロスアンジェルスに至る総延長四千キロにおよぶ長大な電線の道の総仕上げを行っていたのだ。

もともと駅馬車が通っていた寂しい街道は、電線架設のために、数え切れないほどの軍用馬車と数十台の自動車によって踏み固められた。ほんの数年のち、ヘンリー・フォードによる自動車的大量生産が始まったとき、この道は自然とアメリカ合衆国を横断する大動脈として利用されることになった。

ただし、その出自からくる連想によって、本来の「ルート99」と呼ばれることは少なく、「ルート99」と皮肉をこめて呼ばれるようになったのである。

さて、後の「ルート99」の西の端、ロスアンジェルズでは急造された石炭火力発電所群が、もう一端のシカゴでは、シカゴ・エジソン・カンパニーによって建造された火力発電所に加えて、ウィスコンシン州の水力発電所が、来るべき「その時」に備えて待機していた。

当時のアメリカ合衆国の電力生産の実に七〇パーセントが、このアリゾナの小さな町に寄せ集められていたのである。

電線はフラグスタッフの中心で集合し、そこで曲がって赤茶けた

荒野に向かって伸びていた。砂漠に行くこと約五十キロ、その終着点があった。

草一つない荒涼とした地平線の一部が空に向かって盛り上がっていた。上空から見ればその隆起が実は円状であり、中心部の大地がえぐれたように窪んでいるのがわかるだろう。何か空から降ってきたものが地面にめり込んでいるかのようである。だが、そのスケールは途方もなく大きい。

岩石でできた外壁の内側の北の麓に木造の砦が立てられていた。白く塗られた尖塔のてっぺんには四十八の星が描かれたアメリカ国旗が掲げられている。建物としては数百人の兵士がゆうに中に入れるほどの大きさなのだが、この巨大なクレーターの外縁に立ってみるとマツチ箱のように見えた。

「で、テスラはどう言ってきたんだね、マシュー？」当時の合衆国大統領ウィリアム・マッキンレーは、傍らにいたブラウン補佐官にそう尋ねた。砦の中にしつらえられた執務室の中である。その部屋には、合衆国第二十五代大統領と補佐官のブラウン、そしてこの『旧約聖書級の出来事』（後の新聞記事より）の預言者役となっていたパーシヴァル・ローエルの、三人がいた。

「ここです…『東部時間二十日午後七時ヨリ断続的ナル空電現象ヲ観測。コレゾ兆候ト思ワル』…」ブラウン補佐官は一枚の紙切れを

持ち、そう読み上げた。

マッキンレー大統領の顔がみるみる曇った。彼はいらいらと赤い絨毯の上を歩き回り、「だが、『今』では困る！…私は、ヴィルヘルム二世（ドイツ皇帝）、ニコライ二世（ロシア皇帝）、ルーベ大統領（フランス）の委任状をいまだ受け取ってはおらん。…テスラの勘違いではないのか」と言った。

「わかりません、大統領閣下」ブラウン補佐官はそう答えるしかなかった。マッキンレーもそのことはわかっていた。ニコラ・テスラほどの人物が『今がその時だ』と言えばおそらくそれは正しいのだ。

「大統領閣下、もはや時間はありません。ご決断を」ローエルが重々しく言った。

マッキンレーは椅子に座り込んで、自分の寂しくなった頭髪を撫でた。

「…戦争が起きるぞ」彼は有能な政治家としての直感で、そうつぶやいた。

「我々はもはや欧州情勢に関わるべきではありません」ブラウン補佐官は言った。

「恨みまずぞ、ミスタ・ローエル。あなたは私を人類の未承認の代表者にしたうえで、人類を裏切らせようとしておられる」大統領はそう言った。

後の自伝でパーシヴァル・ローエルは、その時黙って頭を下げるしかなかった、と書いた。まさにマッキンレー大統領の言うとおりであったからだ。大統領は最終的な指示を出した。それはたちまち

フラグスタッフの臨時変電所に伝えられた。始まったのである。

三人は執務室から揃って出た。数百人の兵士たちが担え筒の構えで彼らを隕石孔の中心まで導いた。

「なぜ、アメリカのこの地だったのか、私にはわかるような気がする…根拠はないのだが」ローエルと並んでクレーターの底を歩きながら、突然マツキンレーは言った。ローエルは頷いた。『私も大統領の意見に同感だった。ここが隕石孔であるということが、彼らがこのアリゾナを選んだ理由なのだ。科学的には何一つ証明はできないが』と同じ自伝でローエルは書いている。

数十年後、推論ではあるが一応の説明が付けられた。五万年前に地球に激突した隕石そのものに、『彼ら』のうちで、ある特別な名前と呼ばれる存在が関与していたから、というのがその説明である。

西部時間九月二十一日午後六時六分六秒、薄暮に包まれた隕石孔の中心に立てられた巨大な避雷針のような鉄塔から、天に向かって光の矢が放たれた。その時、周囲にいた数百名の兵士が持つ銃が帯電し、二名が感電死した。あらかじめ金属を身に付けるなど指示されていた大統領と補佐官とローエルは無事だった。

五分後、静電気によって髪の毛が逆立ってしまった面々は、空を見上げて口々に叫ぶことになる。徐々に暗さを増していく空に、壮麗なオーロラが輝いているのだ。それは風に流される吹き流しのようにゆらめいていた。

「…大統領閣下」ブラウン補佐官はマツキンレーにささやいた。

マツキンレー大統領は輝く空から視線を落とし、いつの間にか目の前に立っている異形の者どもと対面した。

『彼らは全部で五十体以上はいただろう…。蛙のように顔がひしゃげたもの、全体が深紅で黒い角の生えたもの、昆虫を思わせるもの、ねばねばした液体が顔から垂れているもの、体中に黒い蛇のようなものが巻き付いているもの、どれ一つとして同じ風貌をもつ者がないほどバラエティに富んでいた。私は恐怖を感じてはいたが、同時にどこか懐かしい感じを抱いていた。なぜなら、彼らの容姿は、幼い頃からなんとなく抱いていた想像の範疇から全く逸脱するものではなかったのである』後にローエルはこの瞬間の様子をこう書いている。

伝承に基づく推論から、彼らは七十二体出現したと考えられている。

その中の一体である山羊に似た頭部を持つ者が前に進み出て、非常に明瞭な英語で「王はどこだ？」と言った。ウィリアム・マツキンレーが前に進み出て「私は、人民に選ばれた者であり、王ではない。だが、この場の責任者である」と答えた。その時、その異形の者は長く裂けた唇の端をゆがめた。ローエルにはそれが皮肉な笑みに見えた。

「ではお前が署名をするのか？」その者は言った。

「必要であれば」マツキンレーは答えた。

「お前たちの判断を求めているのではない」そう言って、その者は

醜いかぎ爪のついた左手をさつと振った。その瞬間、何もなかった地面の上に大きなマホガニー製に見える木製のデスクと、肘掛けの付いた革張りの椅子が現れた。ご丁寧に白い羽ペンと、インク壺と卓上ランプまで乗っかっている。

「対価が何であるか知りたい」引き延ばし策のつもりでマッキンレー大統領は言った。

「よからう」突然、山羊に似たその者は黒い蛇に変身した。蛇はゆつくりと地面を這って、マッキンレー大統領の足下までやってきた。「果実を取れ」蛇は鎌首をマッキンレーの胸のあたりまで持ち上げた。いつの間にかその蛇の口には、一冊の革装幀の本がくわえられていた。果実を取れ、唱和するように周りにいる古き者どもが声をそろえて言った。

マッキンレーは躊躇していた。

そのとき、マシュー・ブラウン大統領補佐官が歩み出て、蛇がくわえた書物に手を伸ばした。彼は大統領の身代わりになって、その本を調べようとしたのだった。

「お前はもう一人の王か？」蛇はブラウン補佐官に本を渡したあと、そう尋ねた。

「いや、王ではない。王に仕えるものだ」マシュー・ブラウンはそう答えた。それが彼の最期の言葉になった。その大柄な白人男性の体は、まるで油の染みたいたまつのように派手に燃え上がったのだ。ローエルも、大統領も、取り囲んだ兵士たちも叫ぶ間もなかった。『燃え残ったのは、補佐官の手のひらと、その本だけだった。わず

かばかりの白い灰が隕石孔の中を巻いている風に飛ばされていった』ローエルはこう書いている。

「…今度は『女』ではなく、『この世の王』に与えることにしたのだ。

王以外の者が触れてはならぬ」蛇は言った。

マッキンレー大統領は南北戦争に従軍したことのある人物だった。彼は恐怖を押さえつけ、かつては勇敢な補佐官のものであった手のひらの指を開いて、本を手にした。

『セファール・ラジエル』…お前たち人間がその書物を手にするのはこれが二度目である。契約の後、その書物を十年学べ。すると空から福音がもたらされるだろう』蛇は言った。

福音だ、福音だ。よろこべ。良き知らせを待て。異形の者は口々にそう言って、けらけらと耳障りな笑い声を上げた。

「さあ、サインしろ。王よ」蛇は再び山羊の頭を持つ怪物に変身した。

マッキンレー大統領は、救いを求めるようにパーシヴァル・ローエルを見た。大統領にも、ローエルにも事実上選肢は無かった。ウィリアム・マッキンレーは椅子に腰掛けて、羽ペンを取った。そのとたん、机の上に一枚の羊皮紙が現れた。契約書である。

「サインしろ、王よ」化け物はにやにやと笑いながら繰り返した。「…私はさぞ後世の人々に憎まれるのだろうな」マッキンレー大統領はつぶやいた。

山羊に似た怪物は突然、アメリカ人がやるように大げさに肩をすくめた。そして、それまでとうって変わった、くだけた口調で言った。

「そんなことはない。私には未来が見える。大統領閣下、あなたミスタ・プレジデントの

選択は百年後も勇氣ある行為として非常に高く評価されている」

「本当か？」「マツキンレーは緊張のあまりその口調の変化に気づかず、振り返って言った。

『『悪魔のささやき』を信じる信じないは、人間に与えられた最高の自由だ』その者は、唇を突き出し、もっともらしくそう言った。

「わかった」そう言って、ウィリアム・マツキンレーはペンを取り、羊皮紙の署名欄にサインをした。

その悪魔の言うことは正しかった。

百年後のこんにち、アメリカ合衆国第二十五代大統領ウィリアム・マツキンレーのこの時の決断を賞賛する声は多いが、批判は少ない。

とはいうものの、このとき、未来が見えるという悪魔は、ある重要な事実を一点だけ言わなかったのである。

言わなかったただけなので、嘘をついたわけではない。

その署名から二年後の一九〇一年九月、マツキンレー大統領は、ニューヨーク州バッファロー市で、百年後よりも遙かに多かった当時の批判者の一人に暗殺されたのであった。

もう、おわかりだろうか？…あの時、あの場所で起きたことは「世界の終わり」の始まりではなく、「契約」であった。

そして、新旧二度にわたる神との契約と違い、悪魔との契約は人類に具体的な恩恵をもたらしたといえよう。

そう、人類に魔法が与えられたのだ。自分自身の未来とひきかえに。

完